

シンポジウム「東洋学・アジア研究の新潮流」

日時：2025 年 12 月 6 日（土）13 時 30 分～17 時 30 分

会場：東京大学本郷キャンパス法文 2 号館 1 番大教室

開会挨拶：斎藤 明（国際仏教学大学院大学特任教授、東洋学・アジア研究連絡協議会会長）

総合司会：島田竜登（東京大学准教授）

報告：八尾 史（東京大学准教授）：インド仏教写本研究の一角から―「根本説一切有部律」サンスクリット断片の解説について―

守川知子（東京大学准教授）：聖地・聖廟巡礼の歴史にみる西アジアのイスラーム社会

鈴木英明（国立民俗博物館准教授）：海域史研究の転回可能性―インド洋西海域史からインド洋西海域世界史へ―

竹元規人（福岡教育大学准教授）：中国近現代史学史・学術史の位置と射程

活動報告：吉澤誠一郎（東京大学教授）：日本学術会議について

閉会挨拶：岸本美緒（お茶の水女子大学名誉教授）

聴講無料

参加をご希望の方は右の QR コードからのお申込み、
または iec@tohogakkai.com まで氏名・所属先・
メールアドレスを添えてご連絡ください。



〔報告内容〕

八尾 史：インド仏教写本研究の一角から―「根本説一切有部律」サンスクリット断片の解説について―

僧院規則集成、説話文学集成といった複数の側面をもつ成立年代不詳の巨大な仏教文献「根本説一切有部律」は、長らく一本の不完全なサンスクリット語写本、漢訳、そして完本であるチベット語訳を通して研究者に知られてきた。この状況を変えたのが、7～8 世紀に遡るもう一本のサンスクリット語写本の出現である。本発表ではこの写本の解説から得られる知見を紹介し、現在のインド仏教僧院規則文献研究におけるサンスクリット写本の重要性について報告する。

守川知子：聖地・聖廟巡礼の歴史にみる西アジアのイスラーム社会

聖地巡礼はいずれの社会にも見られる普遍的な宗教的営為である。イスラーム社会ではメッカ巡礼が名高いが、実際にはメッカ以外にも各地には実に多くの聖者廟や祠堂があり、信徒たちの願掛けの場となっている。本報告では、西アジアの聖廟巡礼を通して、キリスト教とイスラーム、イスラームとゾロアスター教といった宗教間交流の歴史や在地の宗教伝統の継承など、従来語られることのなかった観点からイスラーム社会を検討する。

鈴木英明：海域史研究の転回可能性―インド洋西海域史からインド洋西海域世界史へ―

海域史研究の隆盛によって、こんにちの日本の歴史学研究で「海域」という語は広く人口に膾炙し、この研究分野はそこに一定の立ち位置を確保したかのようである。しかし、同時に、こんにち、海域史研究が本来、有していたはずの動的性格が後景化してきているようにも見受けられる。本報告では、こうした現状を明らかにしたうえで、再びその動的性格を前景化させるべく、インド洋西海域を対象にその転回可能性を探る。

竹元規人：国近現代史学史・学術史の位置と射程

中国近現代史学史、またそれを含む中国学術史は、中国語圏においては長く豊富な研究の蓄積があるが、日本においては専門研究の少ない分野である。この点で、新しい分野であるとも言え、従来からある分野であるとも言える。報告者はこれまで 20 世紀中国において大きな影響を持った胡適・顧頡剛・傅斯年らの史学を研究してきたが、それを例としながら、この分野の研究状況に内外で大きな違いがある由来、この分野の持つ可能性と展望、さらには人文学における新旧の問題について考えたい。

吉澤誠一郎：日本学術会議について

東洋学・アジア研究連絡協議会 シンポジウム「東洋学・アジア研究の新潮流」

東洋学・アジア研究連絡協議会

会長 斎藤 明

日本の東洋学・アジア研究の衰退の危機が指摘されて、すでに久しい時間が経過しました。2015年6月には、文部科学大臣より人文・社会科学系の学科・学部の統廃合を進めるという通知も出され、日本学術会議や多くの大学・研究機関でも様々な対応に追われてきました。

このような危機の到来は、東洋学・アジア研究分野の研究者一人一人に、自己の学問のあり方を根本的に再検討しつつ、この危機を克服し関連する学問の新たな振興をめざすべきことを迫るものです。それとともに、自らの学問的ディシプリンや所属する研究機関・学協会の相異を超えて、多くの研究者が相互に連携・協同しあいながら、これに立ち向かっていくべきことを教えてもいます。

今日、このような危機を克服する方策として、以下のことが重要ではないかと思われます。日本の東洋学・アジア研究は、近代的学問を相対化して、東洋・アジアの文化的諸価値を、時空を超えた世界の普遍的真理という一色の絵具で塗りこめないという長所を持ちつづけてきました。こうした長所を活かしながら、

- 一、21世紀に生きる人間としての共通の視点に立って、東洋・アジアにおける個別的な文化現象の諸価値を内在的に再構成すること。
- 二、こうした個別的な文化研究の積み重ねを総括する中で、東洋・アジアから世界に向かって発信する新たな人間科学 (Human Sciences) を興すこと。

これらを実現する道を切り拓いていくことが重要なのではないのでしょうか。

私たち、約40の学協会は、2004（平成16）年9月、東洋学・アジア研究連絡協議会を設立しました。その目的は、東洋・アジアの諸文化を各種のディシプリンをもって研究する学協会が、将来におけるこの学問の一層の振興を図り、そのために相互の学術交流と連絡協議を行い、また国際的な東洋学・アジア研究の動きにも対応すること、などにありました。

東洋学・アジア研究連絡協議会は、以上の設立趣意と現状への課題意識に基づき、2013（平成25）年12月からシンポジウム「東洋学・アジア研究の新たな振興をめざして」を5年間に亘って開催し、2019年度からは「近未来の東洋学・アジア研究」を主題としたシンポジウムを行ってきました。また、来年度には国際会議の開催も計画しています。

本年度のシンポジウムは「東洋学・アジア研究の新潮流」と題して、裏面の要領により開催いたします。講師はいずれも、各分野において新たな地平を切り拓こうと努めておられる若手の研究者の方々にお願いしました。加えて、日本学術会議の東洋学・アジア研究部門である「アジア研究・対アジア関係分科会」ではどのような活動を行っているのか、副委員長を務める吉澤誠一郎先生にご報告いただきます。

研究者・学生・市民のみなさん、お誘いあわせのうえ、ふるってご参加下さい。